



追悼記 「花・虫・人」に徹した岡田先生

酒井 哲夫

岡田一次略年表

- 1909年 9月17日 兵庫県浜坂町にて生まれる
1934年 北海道大学理学部動物学科を卒業
松村松年博士と南樺太へ昆虫調査行
同大学農学部昆虫学教室助手となる
1939年 満州・公主嶺農事試験場へ
昆虫科技佐として赴任
1946年 中央気象台産業気象課へ
1948年 北海道大学より農学博士
1949年 玉川大学農学部に初代教授として赴任
1965年 国際養蜂会議（ルーマニア）に
日本代表として出席
1972年 玉川大学農学部長に
国際ミツバチ研究協会
(IBRA, イギリス) 理事に
1977年 玉川大学大学院農学研究科長に
1979年 玉川大学ミツバチ科学研究所
(現在同研究施設) 主任に
1982年 勲三等瑞宝章を受賞
1985年 玉川大学名誉教授に
第30回国際養蜂会議（名古屋）で
事務総長を務める
1999年 3月18日没 慈苑院蜜響碩学自然居士

1950年（昭和25年）、岡田先生が玉川大学で新進気鋭の教授としてミツバチの研究を始められた年に私は、3年次の学生だった。以来50年、学生時代から玉川大学に勤務した間は勿論のこと、1993年（平成5年）定年退職後の今日まで、ミツバチ研究の指導はもとより、公私共に岡田先生それに奥様に一番長く、しかも身近でお世話になった弟子として、感慨無量で筆をとっている。

先生のご経歴（略年表および末尾参照）を改めて繙いてみて、「花・虫・人」に徹した先生であったことを思うのは私一人ではあるまい。

1909年（明治42年）兵庫県の日本海側浜坂町で呱呱の声をあげられた先生は、子供の頃から蝶やセミの採集に夢中だった昆虫少年のようである。鳥取県立第一中学校在学中に、珍蝶キマダラルリツバメを採集され、発表されるなど既に中学時代から昆虫学者としての頭角を現さ



このページ左：玉川大学のスタッフとしての若き日の岡田先生。通大スクーリング慰労会で訪れた大島三原山山頂にて（1951）、右：学生とともに玉川産ハチミツを販売（1952）

次ページ左上：徳田博士を囲んで（1952）、左下：千葉農試で開催されたハチミツ大学（1952）、右上：スイスの教育者チンメルマン博士が玉川学園来訪（1953）、ミツバチを見せる、右下：その縁で送られてきたニグラニグラを玉川大学創始者の小原國芳学長（当時）に報告する（1954）。

れていた。

花と虫を追って、南国土佐の高知高等学校から北のエキゾチックな北海道帝国大学へと進まれ、1934年（昭和9年）同大学理学部動物学科を卒業、同大学農学部副手としてキノコバエなど双翅目の分類研究で新種の発見など成果を挙げられた。

1939年（昭和14年）満州（現中華人民共和国東北地区）の公主嶺農事試験場昆虫科技佐として赴任された。当時、我が国にとって大切な作物であった大豆の害虫であるダイズシンクイガとその天敵シナトゲアメバチの研究に力を尽くされ、この研究を主論文として、1948年（昭和23年）北海道大学から農学博士の学位を授与された。満州では太平洋戦争の末期1944年（昭和19年）に現地召集で関東軍に入隊され、貴重な軍隊生活も経験されている。終戦時は幸いにも朝鮮との国境付近で迎えられたので、内地への引き上げは早く、1946年（昭和21年）4月からは中央气象台産業気象課へ勤務されている。農地の微気象などの研究はその後玉川大学でのミツバチ研究のために大いに役立った。

1949年（昭和24年）新制大学発足に伴い、小原國芳先生に懇願され、玉川大学教授として

玉川の丘へ。ちなみにお年は39歳の若さだった。当時の玉川学園のキャンパスとその周辺は、武蔵野の自然がそのまま残っていて、春にはナタネ、レンゲ、四季折々の花も多く咲き乱れ、もちろん学園の丘の名物ソメイヨシノの花盛りは桃源郷を思わせる美しさであったにちがいない。

この環境を見られた岡田先生は、害虫防除よりも益虫の研究、それはミツバチの研究だと一念発起され、小原國芳先生の大賛成を得て、それから50年をミツバチ研究に専念されるようになったと伺っている。先ず先進国に学ばねばと常道を歩まれ、アメリカ合衆国アイオワ大学のパドック（Paddock）教授、イギリスのクレーン（Crane）博士との交流から始まった。

一方、玉川大学学内では、農学科長（1953年、昭和28年）、農学部長（1972年、昭和47年）となられ、農学部の発展を願って大学院農学研究科の設立に尽力され、その内容も資源生物学専攻として斬新な展開をと漸く1977年（昭和52年）その認可にこぎつけ、初代の研究科長になられるなど、要職を歴任された。

1978年（昭和53年）、玉川大学創立50周年を記念して、玉川大学学術教育研究所の設立に



当り、その中に1950年(昭和25年)以来の実績が認められて、ミツバチ科学研究所(現研究施設)が設置され、初代の主任(所長)に就任された。わが国唯一のミツバチ科学の総合研究機関として、その位置付けを確固たるものにしたことはすべて岡田先生の功績である。

1985年(昭和60年)3月退職されるまで、農学部昆虫学研究室の主任教授として、卒業論文を直接指導された卒業生は260人にも及び、玉川大学の後継者のみならず、養蜂学界、昆虫学や医動物学界、それに教育者、農業専門家等々、日本の将来を背負う卒業生を多く輩出していることも大変ありがたいことである。

以上のように36年に亘り玉川大学に勤務され、学生の教育・研究指導に当たりながら大学での要職を歴任され、学界・教育界の振興に大きく寄与され、私学の充実発展に尽くされた功績が顕著であるとして、1982年(昭和57年)11月には、勲三等に叙せられ、瑞宝章を受賞された。

日本国内のミツバチ科学、養蜂、ミツバチ生産物関係の方々との交流にも特に力を尽くされた。すでに昭和20年代の後半から、「ミツバチ大学校」、「ミツバチ研究会」などの名称で、玉

川大学農学部を主会場として、養蜂家を中心とした研究会を開催されていた。千葉にあった畜産試験場蜜蜂研究室(徳田義信博士)見学も盛りこんだこともあったので、一泊二日の会期だったと記憶している。現在、毎年1月定期的に開催している「ミツバチ科学研究会」は同研究所(現研究施設)創立を期して始められた。この時期ミツバチが越冬中でいわゆる蜂閑期であり、養蜂関係者も参加しやすく、常に200余名の出席者がある。ミツバチ関係者が一堂に会して学生の研究発表を聞き、最新の情報を知り、お互いに日頃の疑問を確かめ合う好機として活用されている。学問的裏付けに乏しかった日本の養蜂学界、ミツバチ生産物学界に光明を与えようと努力されたのも岡田先生だった。ハチミツ、蜂ろう、ローヤルゼリー、花粉媒介、雄蜂児利用、プロポリス等々の研究をそれぞれ時宣を得て行い、学会にその研究成果を公表され、時には大いに奨励され、時には厳しい注意を与えられていたことは、よく知られているところである。このような研究、指導、普及等の貢献に対して1983年(昭和58年)には日本養蜂はちみつ協会から表彰状が授与された。

一方、国際交流については先述の通りいち早



く取り組まれたのであるが、海外出張が困難な時期を経て、1965年（昭和40年）国際養蜂会議ルーマニア大会に日本代表として出席、講演されたのをきっかけに、世界各国の研究者、養蜂学者との交流は急速に深まり、1969年（昭和44年）には国際養蜂者協会連合（Apimondia）の常任委員、1973年（昭和48年）には国際ミツバチ研究協会（IBRA）の理事などを歴任され、1985年（昭和60年）国際養蜂会議名古屋大会では、事務総長として、アジアで始めて開催された、しかも第30回という記念すべき大会を成功させるなどそのご活躍は目ざましいものがあった。このような関係で世界各国から玉川大学を訪問したミツバチの関係者は述べ200人を越え、しかもそのほとんどが先生のお宅へ迎えられ、奥様の心のこもったおもてなしを受け、その感謝の便りが常に寄せられていた。

著書および学術論文等については末尾に記した業績目録に詳しいが、玉川大学出版部発行の



前ページ左上：昆虫学研究室でくつろいで（1972）、右上：レイドロー博士来日（1980）。セミナーのあと、研究室での楽しいお茶のひととき（1980）、左下：来日したモース博士ご一家を案内して学園の丘をめぐる（1982）、右下：海外からの来客を自宅に招いては必ず和菓子などを勧めた（1985）。このページ：学会や研究会では書籍や絵はがきなど多彩な小道具を使って発表した。玉川大学で行われた昆虫学会関東支部大会での発表（1983）。

写真提供者（敬称略）：大柴 中，酒井哲夫，栗原毅，本多 隆，小野正人（順不同）

4種類の百科事典にかかわられたほか、『畜産昆虫学』『ミツバチの科学』『ミツバチ記』『ニホンミツバチ誌』など単、共著を含め数多い。学術論文などはキノコバエ関係32編、ダイズシンクイガ関係22編、気象と昆虫に関するもの8編、ミツバチおよびミツバチ生産物に関するものは、学術論文から一般雑誌などの記事を含めると300編を越えている。

大学での講義、実験・実習も大変ユニークで、「Study nature, not books」をモットーに、教えるのではなく、自ら学び、研究に取り組むよう徹底した指導をなされた。一方、研究室を離れると学生たちをよくご自宅に呼び集め、奥様お手作りのご馳走を囲んで歓談の場を作っていた。学生たちが寄せ書きなどをお願いすると、必ず「花・虫・人」と時には花を赤、虫を青、人を黒と色を変えて書いていただいた。「花咲き、蜜の流れる大自然の恵みに敬虔な祈りを捧げ、健全な存続を熱望します」（『ミツバチ記』より）との言葉は先生の遺された誠に先生の花・虫・人に徹して天寿を全うされた真骨頂といえる言葉である。

学問・研究に対する厳しさと、人間としてのやさしさと深い思いやりを身をもって教えてくださった先生を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。

注）米寿を記念して本誌18巻3号（1997）は岡田一次先生に寄せた記事および業績目録を特集したので参照されたい。

TETSUO SAKAI. Obituary: Professor Emeritus Ichiji Okada. Honeybee Science (1999) 20(2): 49-52.

Former Director of the Institute of Honeybee Science, Tamagawa University, died on 18 March, 1999. His career in Tamagawa University started in 1949 and made him a world-renowned researcher, educator and consultant for the beekeepers in Japan. Prof. Okada dedicated himself for the advancement of apicultural research and published more than ten books and 300 papers. When Tamagawa University established the Institute of Honeybee Science in 1979, he became the first director.